

3. おわりに

3代目林長左衛門（源左衛門）筆記の安政5年（1858）と安政6年（1859）の「場所見回り日記」に見られる方言の「音韻」と「語法」は以上のようなものである。その中に江戸時代後期の北海道南地域の松前、そして余市で使われていた海岸部方言の一端を垣間見ることができる。

北海道海岸部方言の形成過程を歴史的にとらえるには、このような江戸時代の資料を見つけたし、それらの資料を整理・集積して、音韻、語法、語彙面での考察を積み重ね、総合的に考察していくことが考えられる。

余市運上屋林家が残した江戸時代からの多くの日記類は、北海道での江戸時代の方言文献資料がほとんど見られない中において貴重な資料である。

明治、大正、昭和期に日本海側の地域で鯊漁を経営した鯊網元が残した「漁場日誌」が数は少ないが北海道内に残されている。それらの「漁場日誌」とともに、余市運上屋林家が残した江戸時代からの日記類は、北海道海岸部方言を歴史的にとらえるために貢献できる資料であると思われる。

札幌方言名詞アクセントの実時間パネル調査 第二次報告 ～変異理論的考察を中心に～¹

北星学園大学 高野照司

1. はじめに

本発表では、筆者が2010年秋より札幌市山鼻地区で取り組んできた札幌方言アクセントの共通語化に関する実時間パネル調査のその後の進捗状況を報告する。2011年4月の第192回例会で第一次報告を行ったが、今回を「第二次報告」とし、今年刊行予定の北海道方言研究会40周年記念論文集には最終報告を寄稿する予定である。今回は、主要資料の掲載を中心としたレジメに沿って発表を進める。

2. 先行調査（小野1991・1993）の概要

- ・ 調査目的：札幌方言アクセントの共通語化の動態を知る。
- ・ 調査地：市内で最も「札幌らしい」山鼻・屯田兵にまつわる歴史・生え抜きが多く町内会組織も安定。
- ・ データ：二会場で二日間にわたる面接調査（1990年暮れ）：小学5年生20名、中学2年生20名、20代16名、30代16名、40代16名、50代17名、60代16名、70代15名、計128名（8名欠席）
- ・ 調査項目：単音節、単独文読み上げ（表1参照、146項目）、長文朗読

表1 分析対象名詞1～4拍のアクセント類型（共通語型）と具体例（小野1993より）

1拍(15項目)	I類(○▼)	柄が(長い)・血が(出た)、など5項目
	II類(○▼)	葉が(散る)・日が(昇る)、など3項目
	III類(●▼)	絵が(うまい)・歯が(白い)、など7項目
2拍(60項目)	I類(○●▼)	鼻が(高い)・輪を(なめる)、など12項目
	II類(○●▼)	指が(見える)・紙を(切る)、など12項目
	III類(○●▼)	花が(咲いた)・壁を(切る)、など12項目
	IV・V類-二拍目広母音(●○▼)	空が(青い)・船が(浮かんでいる)・糸が(太い)、など12項目
	IV・V類-二拍目狭母音(●○▼)	葉が(ある)・松が(見える)、など12項目
3拍(46項目)	A型 ○●●▼	机が(低い)・背中が(かゆい)、など21項目
	B型 ○●●▼	毛抜きが(要る)・力が(強い)、など7項目
	C型 ○●○▼	小麦が(取れる)・つつじが(咲く)、など3項目
	D型 ○●○▼	姿が(美しい)・命が(惜しい)、など15項目
4拍(25項目)	○●●●▼	そろばんが(うまい)、など
	●○○○▼	挨拶を(する)、など
	○●○○▼	果物を(食べる)、など
	○●●○▼	大雨が(降る)、など
	○●●●▼	弟が(いる)、など

- ・ 共通語的アクセントを1点として加算。その結果、若い世代へ向けて着実な共通語化の進行。特に、

¹ 本調査は、国立国語研究所共同研究プロジェクト『接触方言学による「言語変容類型論」の構築』（代表者・朝日祥之）、および文部科学省科学研究費・基盤研究B（No.25284082）『変異理論の新展開と日本語変異データの多角的分析』（2013～2015年度、代表者・松田謙次郎）からの研究助成を受け行われている。

3. 山鼻実時間パネル調査（第一次報告）の概要（高野 2011）

- 調査目的：1)1990年代初頭で途絶えてしまっている（特に都市部における）北海道方言の共通語化調査の再開。2)先行調査（「見かけ上の時間」調査）による変化予測を実時間で検証。3)実時間パネル調査（前回と同じ被験者を一定の時を経て再度検証）による「生涯変化」仮説（言語形成期以降も個人語は変化する）をアクセント相で検証。4)生涯変化が見られるとすればその動機付けはなにか。
- データ：1990年当時の60～70歳代を除く、97名が再調査の対象。1990年当時40～50歳代だった33名の被験者（現調査では60～70歳代）のうち、調査が叶った17名から10名（男5・女5）の分析結果を報告。
- 調査項目：先行調査（小野 1991, 1993）とほぼ同様。面接では、読み上げタスクによる音声収集の他に、20年間での生活上の変化、山鼻地区の変化、方言・標準語意識、趣味や習い事、町内会活動などを含めた日常生活の様子など様々な話題を挙げ話をしてもらい、各話者の「日常語」にできるだけ近い語り音声の収集も併せて行った（Labov 2006）。
- 主な成果：1)アクセント相において生涯変化は大多数の話者においては観察されない。2)全体の数%程度の極めて小規模な変化が見られる場合はあるがアクセント体系を揺るがすものではない。3)経年的変化には共通語化へ向けたものばかりでなく新種（例えば、平板化）の変化も含まれる。4)経年的に共通語化しやすい語彙とそうではない（方言形で留まる）語彙の弁別にははっきりとしたパターンは見られない（せいぜいⅡ類「音が」「橋が」○●▼→○●▽くらいか？）。5)他話者と比べ共通語化へ向けた生涯変化が顕著な話者が1名いた。この話者の標準語・方言意識、配偶者を中心とした方言接触、職業上のことばのニーズなどの社会的要因に着目した体系的分析が必要。

4. 本報告（第二次報告）

- 調査の目的：第一次報告と同様。特に（すくなくとも名詞アクセントにおける）共通語化の法則性や個人差の一部として見られる生涯変化の社会的動機付けに焦点を当てる。
- データ：1990年当時の60～70歳代を除く97名が再調査の対象として本実時間パネル調査が始まったが、山鼻での臨地調査は現在も進行中。現在までのところ、
 - 70代（当時50代）話者9名[男3・女6]
 - 60代（当時40代）話者8名[男4・女4]
 - 50代（当時30代）話者6名[男3・女3]
 - 40代（当時20代）話者5名[男2・女3]
 - 30代（当時小・中学生）女性話者1名 計29名の調査が完了。本発表では30代1名を除く28名の分析結果を論じる。
- 辞退・不明・死亡・転居などで17名（70代）中7名・15名（60代）中7名・16名（50代）中7名、合計21名が収集不能。今春にかけ、40代・30代の調査を完了する予定。
- 20代大学生6名[男2・女4] 札幌市生え抜きの北星学園大学在学生6名を経年的パネルデータとの比較のために追加した。
- 調査項目：第一次報告と同じ。
- 変異理論的統計解析（Varbrul）：共通語化およびその経年的推移に内在する規則性とその動機付けとなりうる要因（言語内要因・社会的要因）の特定を試みる。ただし、社会的要因については最終報告に盛り込む予定。（後節4.2で詳しく解説。）

4.1 分析結果

4.1.1 拍数による経年比較

グラフ1～4（70歳代8名）、グラフ5～9（60歳代9名）、グラフ10～12（50歳代6名）、グラフ13～15（40歳代5名）、グラフ16～18（20代大学生6名）では、被験者ごとに、名詞の拍数による共通語的アクセントの産出の割合（%）を1990年調査と本パネル調査（2010～2012年）間で比較。総点欄には、拍ごとの共通語化の割合を平均した数値を入れてある。

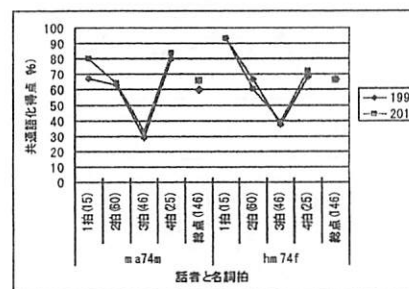
※下線部は比較的顕著な（3%程度以上）共通語へ向けての変化またはそれを示す話者、二重下線部は共通語化とは逆方向への変化またはそれを示す話者

表2 70代（1990年当時50代）話者8名 共通語化指標（割合%）

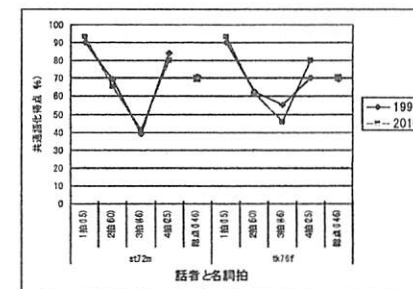
	調査年	1拍名詞	2拍名詞	3拍名詞	4拍名詞	全体平均
男性話者3名	1990	<u>76.8</u>	58.5	37.2	81.3	63.5
	2010	<u>84.4</u>	59.7	38.5	82.7	66.3
女性話者5名	1990	<u>90.7</u>	64.8	<u>48.0</u>	78.0	70.4
	2010	<u>86.6</u>	64.7	<u>52.2</u>	77.6	70.3
全話者8名	1990	85.5	62.5	<u>43.5</u>	79.3	67.8
	2010	85.8	62.8	<u>47.1</u>	79.5	68.8

※以下のグラフで線が一本しか表示されない箇所は1990年と2010年が全く同一であることを示す。

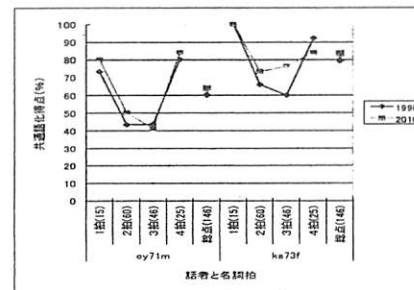
グラフ1: ma74歳男性、hm74歳女性



グラフ2: st72歳男性、tk76歳女性



グラフ3: oy71歳男性、ka73歳女性



グラフ4: wt79歳女性、nm72歳女性

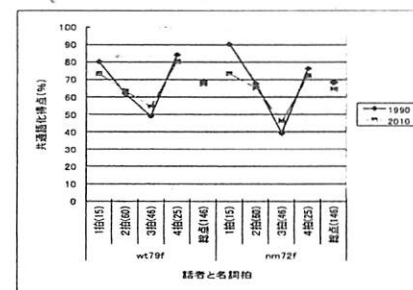
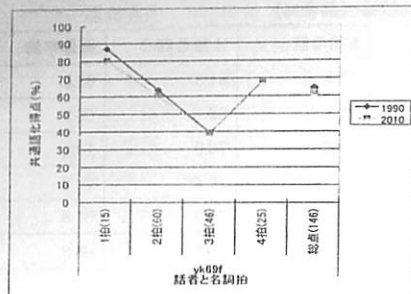


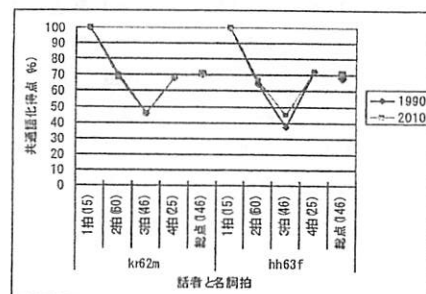
表3 60代(1990年当時40代)話者9名 共通語化指標(割合)

	調査年	1拍名詞	2拍名詞	3拍名詞	4拍名詞	全体平均
男性話者4名	1990	96.7	68.6	53.8	81.9	75.0
	2010-11	96.7	68.3	53.8	80.1	74.8
女性話者5名	1990	<u>95.9</u>	<u>89.5</u>	55.8	80.4	75.6
	2010-11	<u>91.8</u>	<u>72.6</u>	57.9	82.0	76.1
全話者9名	1990	96.3	69.1	54.9	80.8	75.3
	2010-11	94.0	70.7	56.1	81.2	75.5

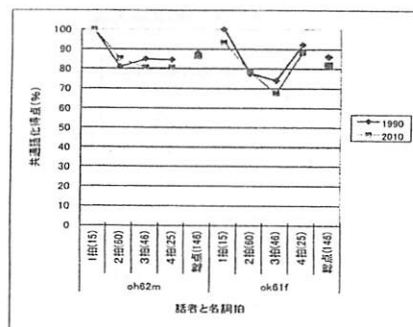
グラフ5: yk69歳女性



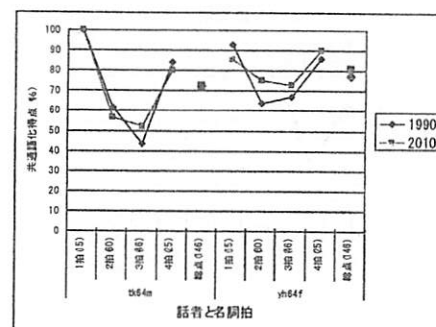
グラフ6: kr62歳男性, hh63歳女性



グラフ7: oh62歳男性, ok61歳女性



グラフ8: tk64歳男性, yh64歳女性



グラフ9: kk66歳男性, sh66歳女性

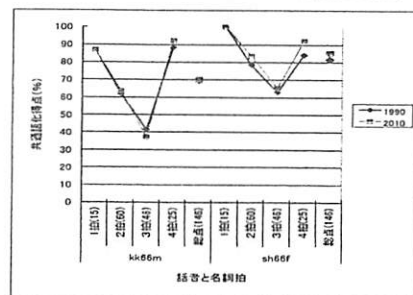
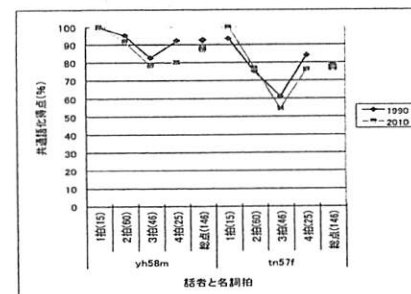


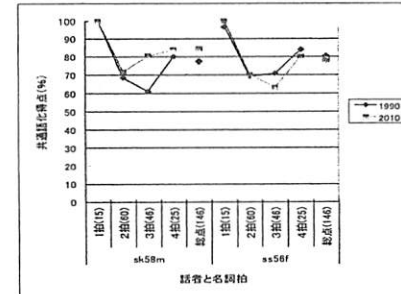
表4 50代(1990年当時30代)話者6名 共通語化指標(割合) → ここからテレビ世代

	調査年	1拍名詞	2拍名詞	3拍名詞	4拍名詞	全体平均
男性話者3名	1990	97.8	85.3	77.1	<u>86.7</u>	86.5
	2011-12	100	85.6	78.3	<u>82.7</u>	86.6
女性話者3名	1990	<u>96.7</u>	74.2	<u>67.4</u>	<u>84.0</u>	80.6
	2011-12	<u>100</u>	76.7	<u>60.1</u>	<u>78.7</u>	78.9
全話者6名	1990	97.1	79.9	71.8	<u>85.3</u>	83.6
	2011-12	100	81.1	69.2	<u>80.7</u>	82.8

グラフ10: yh58歳男性, tn57歳女性



グラフ11: sk58歳男性, ss56歳女性



グラフ12: nm52歳男性, hk52歳女性

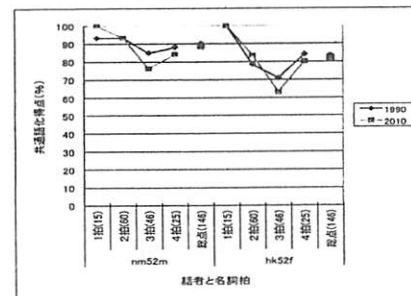
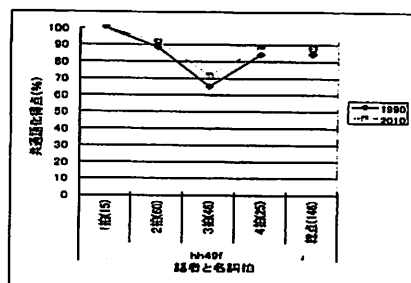


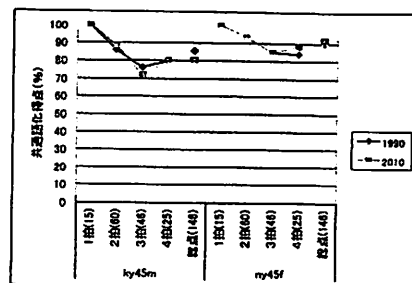
表5 40代(1990年当時20代)話者5名 共通語化指標(割合)

	調査年	1拍名詞	2拍名詞	3拍名詞	4拍名詞	全体平均
男性話者2名	1990	100	89.6	83.7	84.0	89.4
	2011-12	100	92.3	81.5	84.0	87.0
女性話者3名	1990	100	91.6	76.1	85.3	88.3
	2011-12	100	92.3	79.0	85.3	89.1
全話者5名	1990	100	90.8	79.1	84.8	88.7
	2011-12	100	92.3	80.0	84.8	88.3

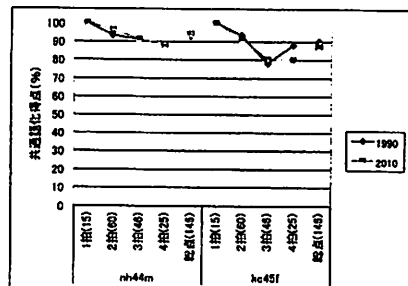
グラフ 13: bh49 歳女性



グラフ 14: kv45 歳男性、ny45 歳女性



グラフ 15: nh44 歳男性、kc45 歳女性

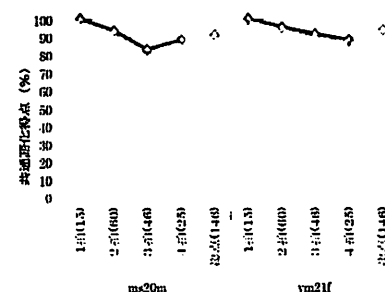


- ・ 総点だけに注目すると、すべての話者において名詞アクセント体系全般を揺るがすような顕著な生涯変化は観察されない(数パーセント以内)。つまり、20年程度では個人のアクセント体系はほとんど変化しない。
- ・ 単純に名詞拍数に正比例して共通語化の進捗が鈍いというわけではなく、特に2拍名詞・3拍名詞の順に進捗が遅れ、1拍・4拍名詞については共通語化が進んでいる。この「V字パターン」は40歳代、20歳代の数名の話者を除き、大多数の被験者間で約20年の時を経て一貫して共有されている。
- ・ 世代間差異を見ると、若い世代へ向け共通語化割合は総点においても徐々に上昇し(底上げされ)、上記のV字パターンも40代辺りから目立たなくなっていく。20代大学生では、フラットな曲線を持つ話者が半数となる(下のグラフ16~18参照)。
- ・ 「テレビ世代」である50歳代、40歳代(1990年当時30歳代以降)では、予測に反して、共通語化と逆行する生涯変化を示す話者が多くいる。
- ・ 女性の標準志向は、最年長世代(70代)で若干は見られるものの、全般的に性差はほとんどないことから(cf., Trudgill 1972)、共通語的アクセントは札幌では威儀形ではなくなってしまった可能性が高い。(つまり、もはや方言の特徴としては一般に認知されていないのではないか。)

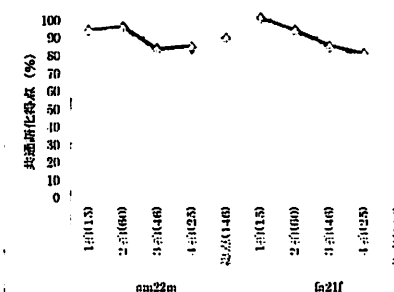
表6 (追加データ・2011年調査) 20代 札幌出身大学生6名 共通語化指標(割合%)

	調査年	1拍名詞	2拍名詞	3拍名詞	4拍名詞	全体平均
男性話者2名	2011	96.7	94.2	82.6	86.0	89.9
女性話者4名	2011	100	92.5	84.7	84.0	90.3
全話者6名	2011	98.9	93.1	84.0	84.7	90.2

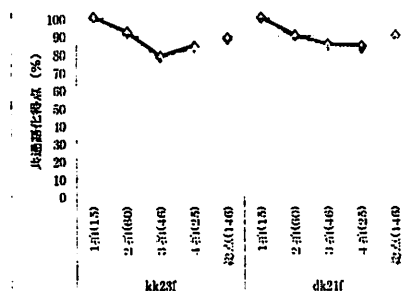
グラフ 16: ms20 歳男性、ym21 歳女性



グラフ 17: am22 歳男性、fa21 歳女性



グラフ 18: kk23 歳女性、dk21 歳女性

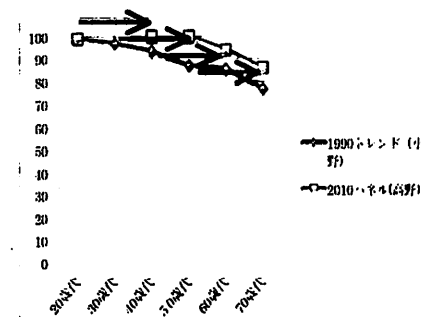


4.1.2 20年間の経年的変化と今後の動向予測

共通語化の割合を年齢層別に並べ、1990年のトレンド調査と今回のパネル調査(2010~2012年)と比較してみると、上記(4.1.1)で確認されたように、共通語化の割合において加齢による変化はほとんどなく、年齢層集団への所属が横へ水平に二段階(20歳分)シフトするだけであることが分かる(例えば、グラフ19で1990年調査の50歳代集団は2010年調査では70歳代集団に所属)。

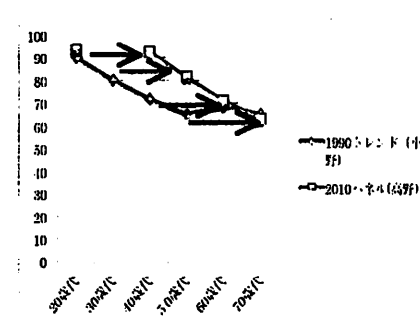
グラフ 19:

1拍名詞 1990トレンド vs. 2010パネル
年齢層別共通語化割合



グラフ 20:

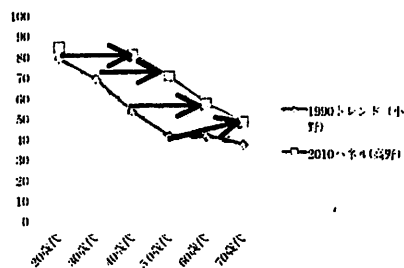
2拍名詞 1990トレンド vs. 2010パネル
年齢層別共通語化割合



グラフ 21:

8 拍名詞 1990 トレンド vs. 2010 パネル

年齢層別共通語化割合



今後も同様の規則的シフトが得られるのであれば、1 拍名詞においては今後約 10 年程度、2 拍名詞は 20 年程度、3 拍名詞は 30 年程度で、札幌市（山鼻地区）の大半の話者は共通語的アクセントを使用していることが推測できる。

4.1.3 1 拍名詞における経年比較

特筆すべき部分のみ解説する。話者 ma (74 歳男性、グラフ 1) においては、I 類 (○▼) の 2 項目 (血が出た、気が重い) において頭高だったアクセントが共通語的な平板に変わった。2010 年調査から 50 歳代 (1990 年当時 30 歳代) 以下の若い世代で共通語化はほぼ完結したと言える。

一方、共通語化とは逆方向の変化を示す話者が老年層で数多い。話者 nm (72 歳女性、グラフ 4) では、I 類 (○▼) の 1 項目 (柄が長い)、II 類 (○▼) の 1 項目 (葉が散る) がそれぞれ頭高 (●▼) で発音され、III 類 (●▼) の 1 項目 (火が燃える) が平板 (○▼) で発音されている。話者 yh (64 歳女性、グラフ 8) でも III 類 (●▼) の 1 項目 (田を耕す) が平板に発音されている。

若年層では、話者 am (22 歳大学生、グラフ 17) のみ 100%を下回るが、III 類 (●▼) の 1 項目 (田を耕す) を平板に発音したことによる。

4.1.4 2 拍名詞における経年比較

尾崎 (1986) でも指摘されたように、札幌方言の共通語化の尺度となりうるのは、第 II 類 (北海道方言的 ○●▼) 名詞 (橋が・紙を、など) の第 III 類化 (○●▼)、第 IV・V 類広母音 (北海道方言的 ○●▼) 名詞 (空が・船が・糸が、など) の同類狭母音 (○●▼) 名詞 (箸が・松が、など) への合流の有無である (図 1)。

図 1 2 拍名詞における類別アクセント型：札幌・東京 (尾崎 1986, 69 頁)

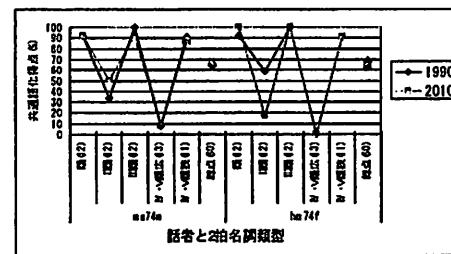
札幌 (=北)	第 I 類 第 II 類 /○○/		第 III 類 /○○'/	第 IV 類 _N 第 V 類 _N /O'○/
			第 IV 類 _N 第 V 類 _N /○○'/	
東京	第 I 類 /○○/	第 II 類 第 III 類 /○○'/		第 IV 類 第 V 類 /O'○/

※Nは第2モーラが狭母音 (i, u)、
の語。Wは広母音 (e, o) の語。

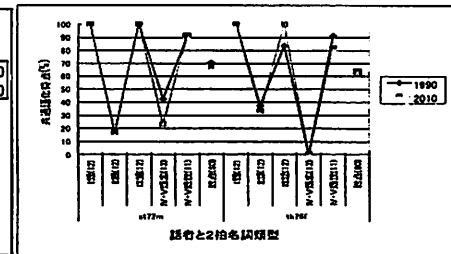
※下線で示す話者は総点および異拍数数名間での比較において (グラフ 1~15)、比較的顕著な (3%程度以上) 共通語化への生涯変化を示すと判断された話者。二重下線で示す話者は共通語化とは逆方向への生涯変化を示すと判断された話者。

70 歳代 (1990 年当時 50 歳代) 話者

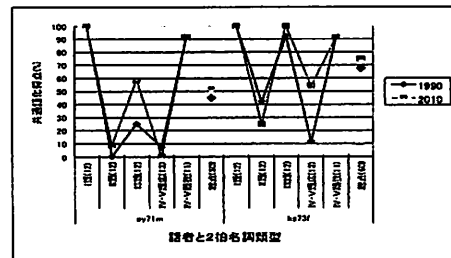
グラフ 22: ma74 歳男性、hm74 歳女性



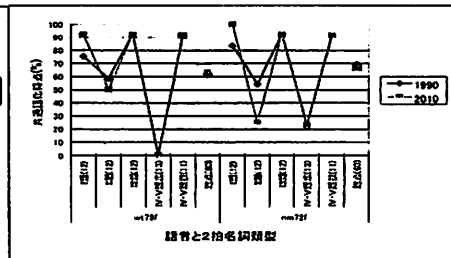
グラフ 23: et72 歳男性、tk76 歳女性



グラフ 24: oy71 歳男性、ke73 歳女性

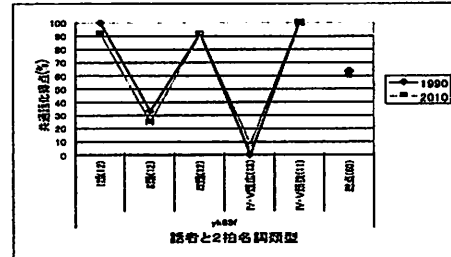


グラフ 25: wt79 歳女性、nm72 歳女性

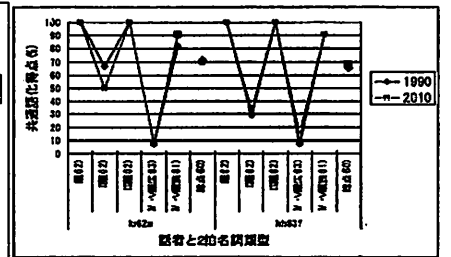


60 歳代 (1990 年当時 40 歳代) 話者

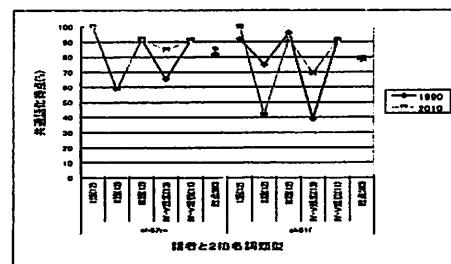
グラフ 26: yk69 歳女性



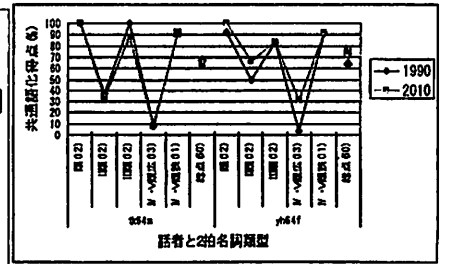
グラフ 27: kr62 歳男性、hh63 歳女性



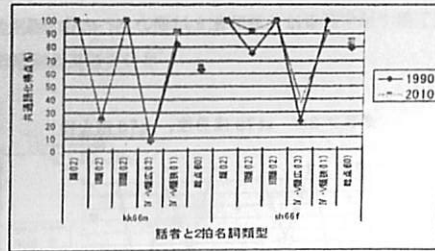
グラフ 28: oh62 歳男性、ok61 歳女性



グラフ 29: tk64 歳男性、yh64 歳女性

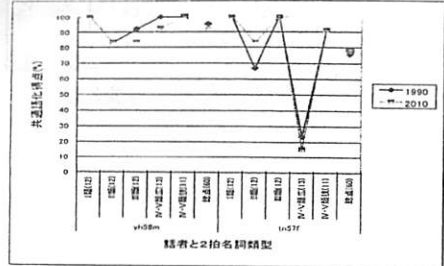


グラフ 30: kk66 歳男性、sh66 歳女性

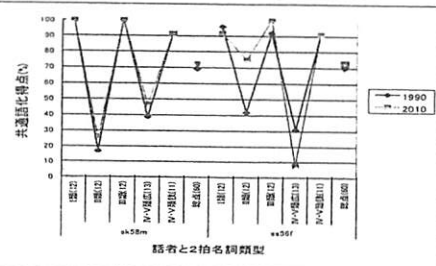


50 歳代 (1990 年当時 30 歳代) 話者

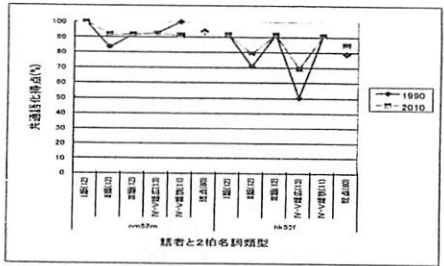
グラフ 31: yh58 歳男性、tn57 歳女性



グラフ 32: sk58 歳男性、ss56 歳女性

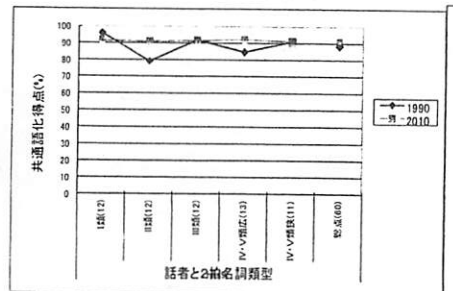


グラフ 33: nm52 歳男性、hk52 歳女性

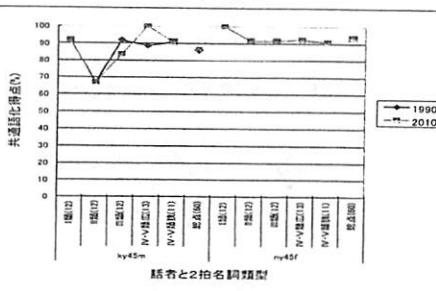


40 歳代 (1990 年当時 20 歳代) 話者

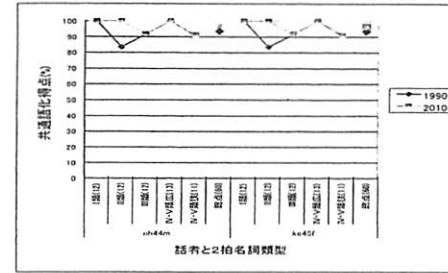
グラフ 34: hh49 歳女性



グラフ 35: ky45 歳男性、ny45 歳女性

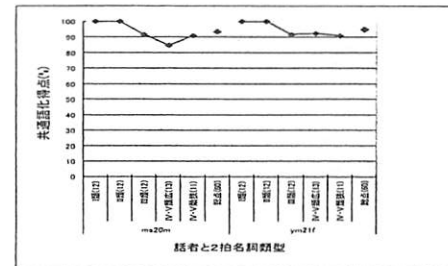


グラフ 36: nh44 歳男性、kc45 歳女性

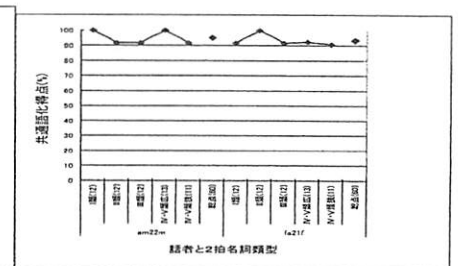


20 歳代大学生 (2011 年調査による追加データ)

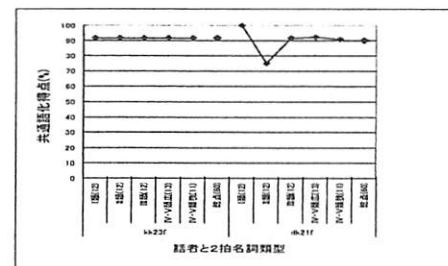
グラフ 37: ms20 歳男性、ym21 歳女性



グラフ 38: am22 歳男性、fa21 歳女性



グラフ 39: kk23 歳女性、dk21 歳女性



- 共通語化が遅れているのは、II 類名詞と IV・V 類広母音名詞。この「W 字パターン」は 50 歳代より上の年齢層の話者により共有。40 歳代より若い世代に向け総点の上昇とともに二つの谷は限りなく浅くなり、20 歳代大学生では、当該要因は効力なくなる (曲線はフラット) (グラフ 37~39)。
- 共通語へ向けた生涯変化、共通語とは逆行する生涯変化のどちらも主にこれらの類で起っている。
- 共通語化へ向けた生涯変化は、小規模ながら以下の話者で確認される: 話者 oy (71 歳男性、グラフ 24)、話者 ks (73 歳女性、グラフ 24)・話者 oh (62 歳男性、グラフ 28)・話者 yh (64 歳女性、グラフ 29)・話者 sh (66 歳女性、グラフ 30)・話者 hk (52 歳女性、グラフ 33)・話者 hh (49 歳女性、グラフ 34)・話者 nh (44 歳男性、グラフ 36)・話者 kc (45 歳女性、グラフ 36)。
- 共通語化とは逆行する生涯変化は、話者 hm (74 歳女性、グラフ 22)、話者 st (72 歳男性、グラフ 23)、話者 ks (73 歳女性、グラフ 24)、話者 nm (72 歳女性、グラフ 25)、話者 kr (62 歳男性、グラフ 27)、話者 ok (61 歳女性、グラフ 28)、話者 ss (56 歳女性、グラフ 32) などの比較的年配層で確認でき、1990 年調査では共通語的であったものから、2010 年調査で北海道方言的アクセントに回帰していることによる (例 st72 男性・ss56 女性・IV・V 類広母音の III 類化 [頭高から中高へ])、hm74 女性・

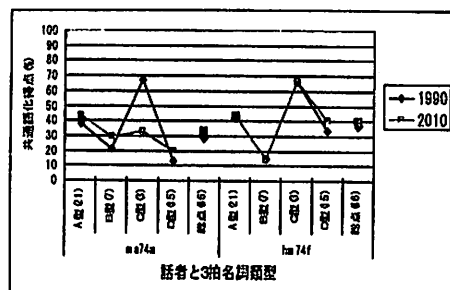
ks73 女性・nm72 女性・kr62 男性・ok61 女性-II 類の I 類化 [中高から平板へ]。この反共通語化では、II 類名詞 (○●▽、「橋が」「石が」) の平板化 (I 類化○●▽) が圧倒的に多い。

4.1.5 3 拍名詞における経年比較

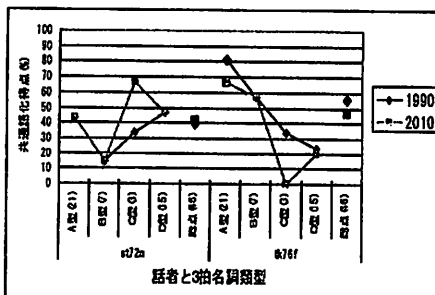
大部分の話者に共通して共通語化が最も遅れている 3 拍名詞は、A 型 ○●●▽ (「机が」等)・B 型 ○●●▽ (「力が」等)・C 型 ○●○▽ (「小麦が」等)・D 型 ●○○▽ (「姿が」等) の 4 分類。(以下では、アクセント型間の項目数が不均衡なため、総点欄では型ごとの割合の平均値ではなく、総点 (46) に対する得点の割合を示した。)

70 歳代 (1990 年当時 50 歳代) 話者

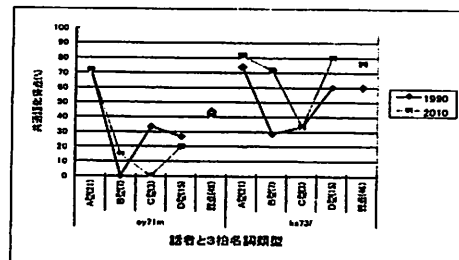
グラフ 40: ma74 歳男性、hm74 歳女性



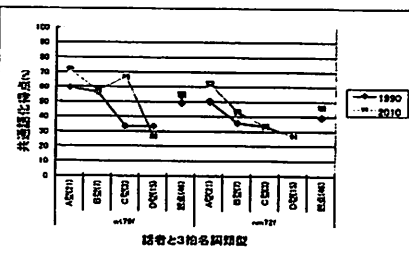
グラフ 41: st72 歳男性、tk76 歳女性



グラフ 42: oy71 歳男性、ka73 歳女性

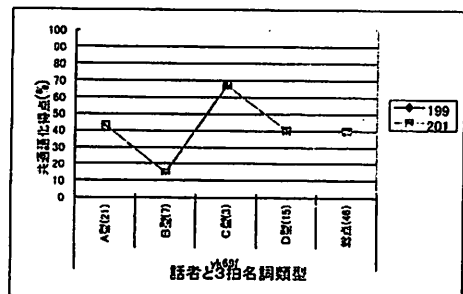


グラフ 43: wt79 歳女性、nm72 歳女性

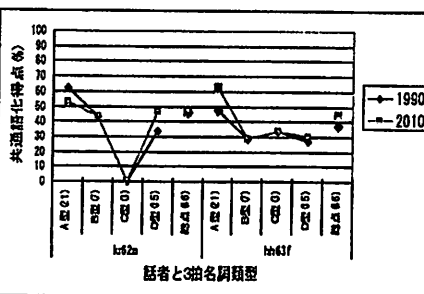


60 歳代 (1990 年当時 40 歳代) 話者

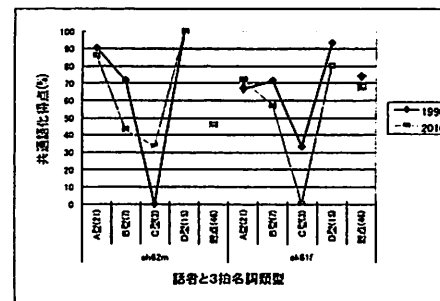
グラフ 44: yh69 歳女性



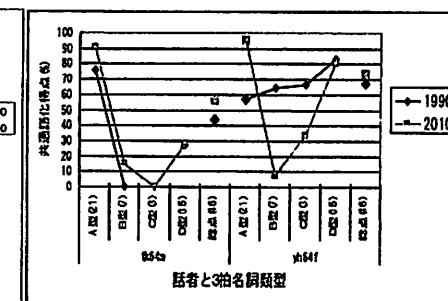
グラフ 45: kr62 歳男性、hh63 歳女性



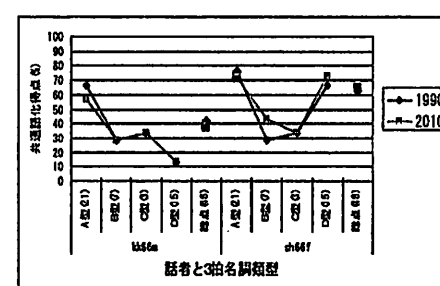
グラフ 46: gh62 歳男性、pk61 歳女性



グラフ 47: tk64 歳男性、yh64 歳女性

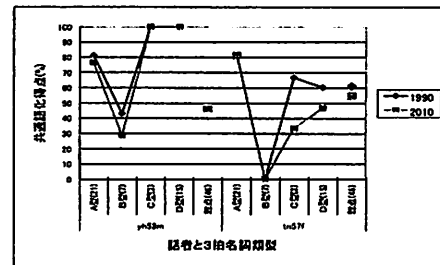


グラフ 48: kk66 歳男性、gh66 歳女性

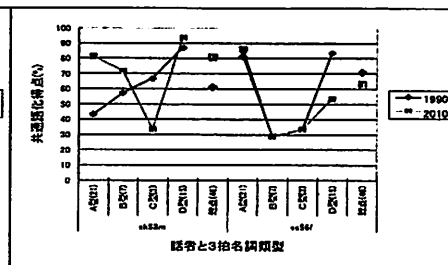


50 歳代 (1990 年当時 30 歳代) 話者

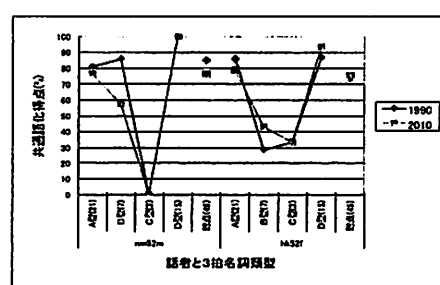
グラフ 49: yh68 歳男性、tn67 歳女性



グラフ 50: pk68 歳男性、gn66 歳女性

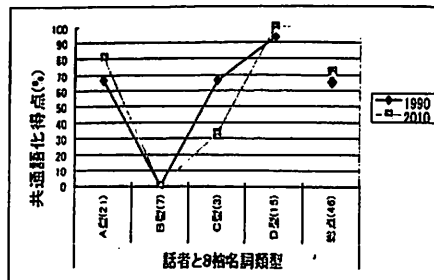


グラフ 51: nm62 歳男性、hk62 歳女性

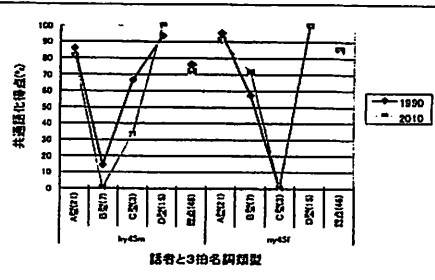


40 歳代 (1990 年当時 20 歳代) 話者

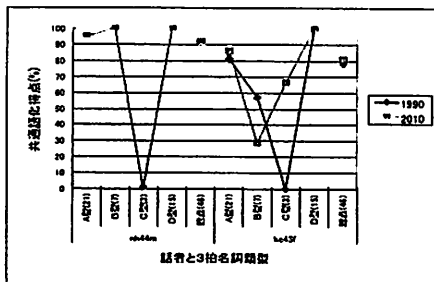
グラフ 52: hh49 歳女性



グラフ 53: ky45 歳男性、ny45 歳女性

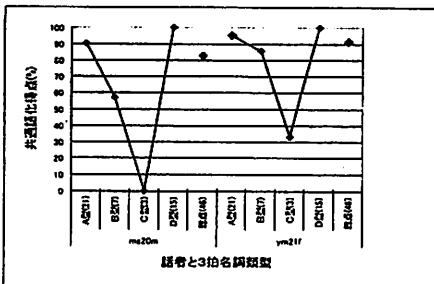


グラフ 54: nh44 歳男性、ke45 歳女性

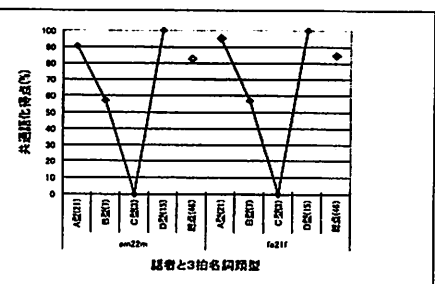


20 歳代大学生 (2011 年調査による追加データ)

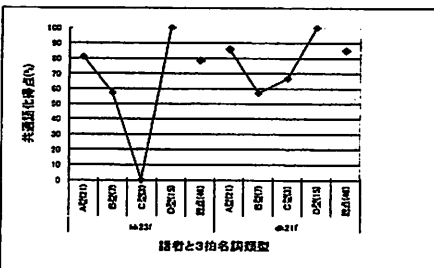
グラフ 55: ms20 歳男性、ym21 歳女性



グラフ 56: am22 歳男性、fa21 歳女性



グラフ 57: kk23 歳女性、dk21 歳女性



- 1 拍、2 拍名詞とは異なり、3 拍名詞では個人差がより大きく、共有される変異パターンを見いだすのは難しい。便宜的に項目数の少ない B 型 (7 項目)・C 型 (3 項目) を考慮からはずして曲線を跳めると、年配世代 (70, 60 歳代) では A 型 ○●●▼ が D 型 ○○○▽ を共通語化で先導し、若い世代へ向け D 型が追いつく (または追い越す) 形をとる。60 歳代辺りから若い世代へ向け「V 字パターン」が安定的に見られるようになる。
- 共通語的ではないアクセントについて、特に老年世代 (70 歳代、60 歳代) で共有されるパターンがある。A 型 ○●●▼ (机・背中、など)・D 型 ○○○▽ (姿・命、など) がともに中高である C 型 ○●○○▽、次いで B 型 ○●●▼ で発音されることが圧倒的に多い。これら A 型・D 型は 50 歳代以降の若い世代で急激に共通語化へ向かう。
- 共通語化が遅れていると思われる B 型 ○●●▼ (毛抜き・力、など) は C 型 ○●○○▽ で、C 型 ○●○○▽ (小麦・つつじ、など) は A 型 ○●●▼ の発音が凡のパターンであるが、若い世代へ向け B 型・C 型ともに A 型 (平板型) での発音が多くなる。
- 依然規模は小さいが、生涯変化も両方向 (共通語化、反共通語化) で見られ、2 拍名詞に比べれば規模は若干大きめである。
- 以下の話者が共通語化へ向けた生涯変化を示す: 話者 ks (73 歳女性、グラフ 42)・話者 wt (79 歳女性、グラフ 43)・話者 nm (72 歳女性、グラフ 43)・話者 hh (66 歳女性、グラフ 45)・話者 tk (64 歳女性、グラフ 47)・話者 sk (58 歳男性、グラフ 50)。特に動きが顕著なのは、話者 ks (73 歳女性、グラフ 42) で、B 型「言葉が」「小豆が」などが方言的 C 型 ○●○○▽ から共通語的 (○●●▼) に変化。D 型「命が」「涙が」も C 型 ○●○○▽ から共通語化 (○●●▼) した。また、話者 yh (64 歳女性、グラフ 47) の A 型 (○●●▼) の伸びが顕著で、「背中が」「兎が」「葉を」「畑を」(方言的 ○●○○▽)・「後ろを」「着物を」(方言的 ○●●▼)・「いちごが」(方言的 ○●○○▽) などが、20 年後の今回調査では軒並み共通語的 (平板型) 発音 (A 型 ○●●▼) になったのは特異なケースと言える。話者 hh (63 歳女性、グラフ 45) と話者 tk (64 歳女性、グラフ 47) では、「狐が」「いちごが」「鯨が」など (方言的 C 型 ○●○○▽) が共通語的 A 型 (○●●▼) へと変化した。
- 以下の話者が共通語と逆行する生涯変化を示す: 話者 tk (76 歳女性、グラフ 41)・話者 oh (62 歳男性、グラフ 46)・話者 ok (61 歳女性、グラフ 46)・話者 yh (64 歳女性、グラフ 47)・話者 tn (57 歳女性、グラフ 49)・話者 ss (56 歳女性、グラフ 50)・話者 nm (52 歳男性、グラフ 51)・話者 ky (45 歳男性、グラフ 53)・話者 kc (45 歳女性、グラフ 54)。これら反共通語化の大部分は主に B 型・C 型で起こる。B 型 (○●●▼) の「刀」「はさみ」「言葉」などは C 型 (○●○○▽) で、「小豆」が A 型 (○●●▼) で発音され、C 型 (○●○○▽) の「小麦」「つつじ」が A 型 (○●●▼) で、「心」が B 型 (○●●▼) で発音されることが多い。他に特異なケースとして、A 型 (○●●▼)「着物」「葉」が B 型 ○●●▼ で、「柱」が D 型 ○○○▽ など見られた (tk76 女性)。
- 20 歳代大学生の変異で特徴的なのは、従来の C 型 ○●○○▽ の消滅と特に共通語化が遅れている B 型の方言的アクセントが 6 名で共有されていることである。本来 C 型である「小麦」「つつじ」は A 型化 (○●●▼)、「心」は B 型化 (○●●▼) した。B 型 (○●●▼) の「毛抜き」「小豆」も A 型化 (○●●▼) し、「はさみ」は C 型 (○●○○▽) で安定している。他に A 型の「あくび」は D 型 (○●○○▽) または C 型 (○●○○▽) になり、「柱」は B 型 (○●●▼) で安定している。従来の共通語的アクセント体系とは異なる体系が札幌の若年層では芽生え始めている可能性が窺える。

4.1.6 4 拍名詞における経年比較

4 拍名詞の共通語化は、どの話者においても約 80% 以上の高い割合を示す (表 2~6)。共通語的では

ないアクセントで代表的な項目は、「オルガンを」「三日月が」(○●●●▼)がそれぞれ○●○○▽・○●○○▽に、「チャンネルを」(●○○○▽)が○●●●▼に、「すずらんが」「二次会が」(○●○○▽)が○●○○▽に、「大雨が」「小刀で」(○●●○▽)が○●●●▼などに発音されている。

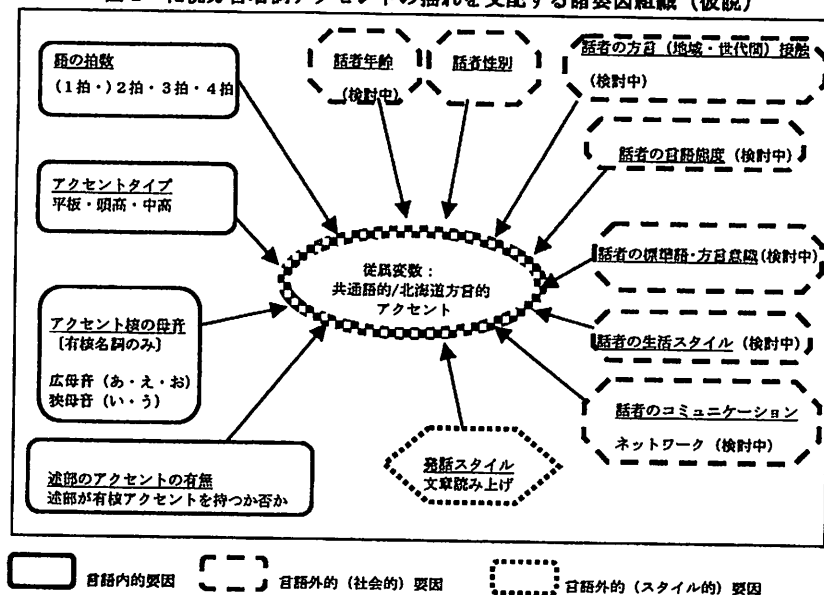
20 歳代大学生では、「チャンネルを」(●○○○▽)、「二次会が」(○●○○▽)がどちらも○●●●▼と平板化し、「小刀」(○●●○▽)が○●○○▽に発音されるのが一般的である。また、「オルガンを」「三日月が」(○●●●▼)がそれぞれ○●○○▽・○●○○▽と発音されるのは年配層と同様である。

4.2 変異理論的観点からの考察

変異理論 (Labov 1972, 1994) は言語運用に観察される「揺れ」に内在する秩序 (規則性) の記述および言語変化のプロセス (起因・埋め込み・伝播・評価) の説明を試みる。これまで見てきた札幌方言名詞アクセントの「揺れ」に内在する規則性を以下のモデル (図 2) を仮説として、Varbrul と呼ばれる多変量解析を用いて統計的に検証したい。

揺れ (従属変数) に影響を与える要因 (独立変数) は一般に「言語内的要因」と「言語外的要因」に分けられ、後者はさらに「社会的要因」と「スタイル的要因」に分けられる。(本調査は、調査票による文章の読み上げタスクのみにより産出された発話をデータとしているためスタイル的要因は考慮外。) 話者の性別以外の「社会的要因」については、現在カテゴリー化を進めている段階であるため、最終報告で成果を論じる予定である。

図 2 札幌方言名詞アクセントの揺れを支配する諸要因組織 (仮説)



4.2.1 Varbrul 解析による結果

表 7 全経年データにおける従属変数のタイプ別分散

1990 から 2010-12 への推移	共通語的 アクセント の維持	方言的 アクセント の維持	共通語への 生涯変化	方言回帰の 生涯変化	合計 3668 発話 28 名 (男 12/女 16)
	2409 (65.7%)	914 (24.9%)	194 (5.3%)	151 (4.1%)	3668

以下の結果は、札幌市山鼻地区で任意抽出により集められた被験者から産出された揺れの豊かな言語運用データに内包される従属変数 (共通語的・方言的アクセント、共通語へ向けた生涯変化・反共通語的生涯変化) と各種独立変数の規則的関係を示す。値は 0~1 の間で示され、0.5 (中立値) を境に「従属変数の産出にプラスの貢献度」が強くなるほど 1 へ近づく値を示し、逆に「産出を抑制するマイナスの力」が強くなるほど 0 へ近い値となる。*印は当該従属変数の産出に対する貢献度・抑制度における全独立変数間の相対的力関係を勘案した上で「統計学的に有意」であることを示す。また、これらの値は「蓋然性指数」(probability) とも解釈でき、本結果は同類の言語共同体または社会集団の成員が同一のコンテキストで類似の発話をした場合、同様の結果が得られるものと推測がたつ。

表 8 共通語的アクセントの使用 (従属変数)

独立変数	1990	2010-12
* 語の拍数: 4 拍	0.68 (81.9% [573/700])	0.65 (81.3% [569/700])
2 拍	0.53 (73.7% [1222/1680])	0.54 (74.2% [1247/1680])
3 拍	0.36 (59.2% [763/1288])	0.37 (60.9% [784/1288])
* アクセントタイプ: 頭高	0.76 (88.7% [796/897])	0.72 (87.0% [780/897])
平板	0.52 (71.5% [854/1194])	0.54 (74.0% [883/1194])
中高	0.33 (57.6% [908/1577])	0.34 (59.4% [937/1577])
* 述部が有核か無核か: 無核	0.55 (75.6% [928/1228])	0.55 (76.3% [937/1228])
有核	0.47 (66.8% [1630/2440])	0.47 (68.2% [1663/2440])
話者の性別: 女性	0.50 (69.3% [1453/2096])	0.50 (70.8% [1484/2096])
男性	0.50 (70.3% [1105/1572])	0.50 (71.0% [1116/1572])

表 9 共通語的アクセントへの生涯変化 (従属変数)

独立変数	
* 語の拍数: 3 拍	0.58 (6.8% [88/1288])
2 拍	0.50 (5.0% [84/1680])
4 拍	0.37 (3.1% [22/700])
* アクセントタイプ: 中高	0.60 (7.0% [110/1577])
平板	0.52 (5.4% [65/1194])
頭高	0.30 (2.1% [19/897])
述部が有核か無核か: 有核	0.52 (5.7% [140/2440])
無核	0.47 (4.4% [54/1228])
* 話者の性別: 女性	0.54 (6.0% [126/2096])
男性	0.45 (4.3% [68/1572])

表 10 方言的アクセント回帰の生涯変化 (従属変数)

独立変数	
*語の拍数: 3 拍	0.57 (5.2% [67/1288])
4 拍	0.47 (3.7% [26/700])
2 拍	0.46 (3.5% [58/1680])
*アクセントタイプ: 中高	0.57 (5.1% [80/1577])
頭高	0.49 (3.9% [35/897])
平板	0.42 (3.0% [36/1194])
述部が有核か無核か: 有核	0.51 (4.3% [106/2440])
無核	0.47 (3.7% [45/1228])
話者の性別: 女性	0.52 (4.5% [94/2096])
男性	0.47 (3.6% [57/1572])

上記表 8 (共通語的アクセントの使用) をベースに「有核アクセント名詞」のみを分析の対象とし、独立変数として「アクセント核のある母音 (広母音・狭母音)」を加えると、統計的に有意な要因として「狭母音 0.58 (73.0% [550/753])、広母音 0.47 (67.1% [1154/1721])」(1990 年)、「狭母音 0.54 (71.6% [539/753])、広母音 0.48 (68.4% [1178/1721])」(2010-12 年) が得られた。(他の有意要因 [名詞拍数・アクセントタイプ・述部のアクセント核の有無] の値と相対的なランクは大きな差はない。)

また、「有核アクセント名詞の共通語化」に関しては、話者の性差が 1990 年調査でのみ統計的に有意になり、男性 0.53 (71.4% [730/1023])、女性 0.48 (67.1% [974/1451]) と男性がリードを示す。しかし、2010-12 年調査では、男性 0.52、女性 0.49 と有意ではなくなった。

5. 最終報告へむけて

1990 年当時 20 代であった最も若い世代の話者 (12 名) の調査が終わっていないため、できるだけ早い時期に消息をつきとめデータを収集したい。また、当時中学生、小学生であった被験者にもできるだけ接触を試みたい。

今後は、上記 4.2 でも触れたように、話者要因としての「社会的要因」のカテゴリー化を適切に行うこと、その後、言語内的要因も含めた様々な影響因子から構成される複雑なネットワークの中で、共通語化および特定の生涯変化がどのように押し進められてきたのかなどといった因果関係の解明に焦点を当てたい。

参考文献

- 尾崎啓光 (1986) 「社会言語学的アプローチから見る
札幌市のアクセントの変遷～名詞篇～」日本学報 第 6
号 67～110 頁
小野米一 (1991) 「札幌市方言多人数調査票について」
『東日本の音声～調査票編～』日本語音声における韻律
的特徴: 東日本における音声の収集と研究 (研究代表者
加藤正信) 41～59 頁
_____. (1993) 「札幌市方言多人数調査資料について」
『東日本の音声 論文篇 (3) 主要都市多人数調査 (札幌

- 市・名古屋市) 報告』研究成果報告書 (研究代表者 加
藤正信) 51～86 頁
高野照司. (2011) 「札幌市方言名詞アクセントの実時
間研究 ～山鼻地区パネル調査 第一次報告」北海道方
言研究会会報 第 88 号 40～58 頁
Labov, W. (1972). *Sociolinguistic Patterns*.
Philadelphia, PA: University of Pennsylvania Press.
_____. (1994). *Principles of Linguistic Change:
Internal Factors*. Cambridge, MA: Blackwell.

北海道方言研究会 第 207 回例会
2014 年 4 月 20 日 札幌北区民会館

網走方言の名詞アクセントについて

ダリン トーマス
北海道大学大学院文学研究科

1. はじめに

本発表では、著者が 2013 年 8 月に北海道網走市で行った現地調査で収集したデータに基づき、1～3 拍の和語名詞を中心に、網走方言の名詞アクセントを記述し、アクセントにおいて指摘できる傾向について考察する。

網走方言は、地理的に海岸に位置しているにも関わらず、北海道内陸方言の系統に属していると考えられる。上野 (1989) のアクセントタイプ分類を使うと、北海道内陸方言は有アクセント、多型、かつ式のないアクセント体系です。弁別的な特徴はビッチの下りをもたらすアクセント核 (いわゆる下げ核) であり、アクセント型の対立数は $n+1$ である。

2. 語類について

本発表では、主に金田一 (1973) が提案した語類に基づいた分析を行う。金田一 (1973) および金田一 (1975) の語類リストから以下の語彙項目を抜粋し、調査票を作成した。

- (1) 1 拍名詞 I 類: 蚊、血、戸
II 類: 葉、日、矢*
III 類: 木、酢、目

共通語 (東京方言) では、1 拍名詞の I・II 類が㊦であり、III 類が㊧である。II 類の「矢」は例外で、㊦で発音される。

- (2) 2 拍名詞 I 類: 海老、滝、烏賊、牛、皿、紐、蜂、蟹、酒、鼻
II 類: 冬、川、旗、梨、橋、町、石、紙、肘、胸
III 類: 山、栗、熊、犬、米、耳、舌、花、靴、馬
IV 類: 味噌、海、空、箸、糸、絹、屑、舟、針、鎌
V 類: 牡蠣、猿、眉、秋、窓、蛇、蜘蛛、足袋、雨、蛙

東京方言では、I 類は例外なく㊦である。II 類と III 類は㊨であり、IV 類と V 類は㊧である (金田一、1973)。上記の調査語彙の中に例外はない。

1 *印の語彙は東京方言で対応の例外をなすとされているものである。